

△▼ 国内研究報告 ▼△

名古屋大学のセミナーに参加して

細田 由利

私は2021年度に国内研究をする機会をいただいで名古屋大学で客員研究員として研究を進めています。とは言っても、国際日本学部が新設されたばかりということもあり、前期2コマ、後期3コマ神奈川大学で学部の授業を受け持ち、大学院生の博士論文の指導も行っているため、週に3～4回はMMキャンパスに行っている状態です。そのため、以前に取らせていただいた在外研究のように研究に専念する生活は送っていませんが、それでも通常よりは研究に従事する時間をいただいでいます。在外研究を取られた方ほど目新しい出来事はないのですが、それでも名古屋大学で開講されている会話分析のセミナーや研究会に定期的に参加させていただく中で気づいたことがいくつかありますので、このNews Letterでご報告させていただきますと思います。

まず、名古屋大学の教員や大学院生の方々の研究に対する熱意に圧倒されています。教員の方々、大学院でもう必要単位を取り終えた方々はセミナーや研究会に出席することは必須ではないにもかかわらず、毎回多くの会話分析の研究に従事している教員、大学院生、卒業生が出席され、その回に提供された相互行為のデータに関する議論が

盛んに行われています。毎回違う参加者がデータを提供してそれについて意見を出し合うのですが、自分自身のデータでないにもかかわらず、参加者たちはあたかも自分のデータであるかのように思い入れをもってデータ観察をし、自らの解釈を述べています。私も前期に1回データを提供させていただきましたが、みなさんにデータを観察していただくことで、今後の研究に役立つ多くの気づきがありました。11月にも違うデータを提供させていただくことになっていますので、またどんな新しい発見があるか楽しみにしています。特に今回は現在書き始めている論文の軸となるデータを提供しようと思っているので、専門家のみなさんに繰り返し観察していただいでの解釈をお伺いし、そこで見られる現象を精緻化していくのが待ち遠しいです。

次に名古屋大学の大学院に所属する中国人留学生の人数の多さ、そして彼等の研究能力や日本語能力および英語能力の高さに驚いています。私は名古屋大学で会話分析を専門とする林誠教授に受け入れていただき客員研究員をしています。林教授の研究室に所属する大学院生および研究生のうち約7割は中国人留学生と韓国人留学生です。

セミナーや研究会に毎回提供される相互行為データは日本語または英語で、彼らにとっては外国語です。それにもかかわらず、日本語や英語の会話の分析に果敢に取り組み、自らの見解を述べている彼らを見ていると、自分が米国の大学院における研究会で英語の会話データを分析しようと奮闘していたころを思い出します。私の場合は第二言語である英語の会話分析に取り組んでいたのですが、彼らは日本語と英語という2つの外国語のデータを考察しなければならないわけですから、私よりも数倍大変なはずです。おそらく彼ら

は授業外でも会話分析の勉強だけでなく、日本語や英語といった語学の勉強にもかなりの時間を費やしているのでしょう。そんな留学生たちを見ていると、また私も初心に戻って努力して学び続けることの大切さを自分自身に言い聞かせることができます。

国内研究期間もあっという間に残りあと5か月となってしまいましたが、残された時間を有効に使い、地道に努力して研究に取り組んでいきたいと思います。